

### 39 北尾春圃著『当壮庵医按』について

安井広迪

北尾春圃(一六五九—一七四一)は、美濃大垣(出身は室原)の名医で、一七二一年と一七一九年の二度の朝鮮通信使との接触、および通信使中の医官、奇斗文との医学問答を記した『桑韓医談』の出版により、全国的にその名を知られた。春圃には著書がいくつもあり、上述の『桑韓医談』の他に『提耳談』『当壮庵方函解』『上池釣魚』『精気神論』などが知られている。

演者は、この度、小曾戸洋氏より北尾春圃の手になる『当壮庵医按』と題した一書の提示を受けた。これは『国書総目録』中にも記載されておらず、他の春圃の書物とは全く別種のものと考えられる。ここでその概要について紹介し、若干の検討を加える。

この書は縦27.2 cm、横19.5 cm、135丁、一冊の写本で、表紙

左上部に「當壮庵医按」と記してある。目次・序文・跋文などはなく、奥書に「享保十七壬子年十月五日、因江府春達之求書之。春圃年七十四」とある。これによって、この書が、江戸に赴いた春圃の四男、春達の求めに応じて、春圃が七十四歳の時、即ち一七三二年に書かれたものであることがわかる。

春圃には五人の男子があつた。長男は春竹(？—一七五二)といい、この書の書かれた時は大垣藩の藩医として春圃のもとを離れ、大垣に在住していたようである。次男は春倫(一六九五—一七六八)といい、医家としてもさることながら、茶人として著名で、藪内家第五代、竹心紹智の四天王の一人として知られた。この時は京都に在住し、時折室原に帰省していたようである。三男は道仙(？—一七三四)といい、すでに彦根藩の藩医となっていたが、地理的に近いこともあり、時々春圃のところに来ていたようである。四男が春達で、この書物が、江戸に出ている彼の為に作成されたものであることは前述の通りである。五男は春泰といい、室原に留って春圃の教えを受けていた。『上池釣魚』にも、春圃が春泰の指導を行っ

ている姿がところどころに見られる。

この書物は、『当壯庵医按』という題名からもわかるように、基本的には医案集で、春圃が自ら経験した症例と息子達の症例を検討し、時に彼らと問答をしながら、自らの意見を加えて書き記したものである。中では、春圃自身の医案が最も多く、次いで道仙・春倫・春泰の順となっている。長子春竹のものも少数ながらみられ、江戸の春達の医案も二例収録されている。

記載は覚え書か日記のような体裁で書かれており、それぞれの記事の冒頭に「一」の字を記してその記事の始まりを示していることが多い。「二」で示してある項目数は二八九項目であるが、これらが全て医案という訳ではなく、単に古医書を引用した春圃の意見であることも少なくない。また「一」の書き出しなしに症例を記載している場合もあり、正確な症例数は確定し難い。これらの症例の記録された時期はところどころに記された「戌」「亥」「子」などの文字と月や日の記載により、一七三〇～一七三二の三年間と思われる。

この書や『当壯庵家方図解』などの春圃の著書をみる

限り、彼は大の臨床好きで、晩年に至っても自分や息子達の医案を検討し、考察を加えるのを無上の楽しみとしていたようである。

四男春泰は江戸にあり、頻繁に帰省することが不可能であった為、一つには自分の勉学の為に、また一つには故郷、室原の北尾家の学術論争の雰囲気味わいたいという希望もあつて、特に春圃に頼んでこの書を作成してもらったものであろう。なお、この書は春圃の自筆本と思われるが、名古屋の古書肆より出たものであることを考慮すると、江戸の春泰には同内容の別本が贈られた可能性もある。

(北里研究所・東洋医学総合研究所)